



観客発信メディア WL（ダブル）一みなさまからのご寄稿、企画持ち込み、活動費のご支援を受け付けています。下記までご連絡ください。

theatrum.wl@gmail.com

staff: 片山幹生・小泉うめ・友田健太郎・廣澤梓

Search keywords

- [WLについて](#)
- [テーマ別・執筆者別索引](#)
- [活動費寄附のお願い](#)
- [劇評](#)

- [ダンス評](#)
- [レポート](#)
- [インタビュー](#)
- [連載・コラムなど](#)
- [おしらせ](#)
- [アーカイブ](#)

[Facebook](#)[Twitter](#)[Email](#)

【インタビュー】フランスの国立劇場で日本語一人芝居を上演

三島景太（SPAC俳優）・平野暁人（通訳・翻訳） インタビュー

『磐谷和泉の栄光と倦怠』のリモージュ公演を終えて

聞き手・構成：片山 幹生（WLスタッフ）



〔平野暁人氏（左）、三島景太氏（右）。2017年1月21日（土）@静岡芸術劇場カフェ・シンデレラ。写真撮影：片山幹生〕

【フランスの国立劇場での単独公演への道のり】

2016年12月、フランスの中央部にある都市、リモージュの国立演劇センター（ユニオン劇場）でSPAC俳優の三島景太の一人芝居『磐谷和泉の栄光と倦怠』が上演された。異国の地の劇場に単身で乗り込み、公演を行うなんて見上げた心意気ではないか！こうした活動はがぜん応援したくなるのが人情というものだ。しかし果敢な挑戦ではあるけれども、フランスの地方都市の劇場で、無名の日本人俳優が日本語（フランス語字幕）で一人芝居を演じたところでそれがどれほどの注目を集めんだろう、とも正直思っていた。ところがこの公演が大成功を収めたのだから痛快だ。フランスを代表するメディア情報誌『テレラマ』の12/5号に劇評が掲載されたのを皮切りに、私が確認した限り、6媒体がこの公演を劇評で取り上げ、いずれも激賞していたのだ。この作品は2014年春に『ジャン×Keitaの隊長退屈男』のタイトルで、SPAC（静岡県立舞台芸術センター）が主催するふじのくに⇄せかい演劇祭で初演されたものだ。



〔リモージュ公演写真。photo: © Tristan Jeanne-Valè〕

初演こそSPACの演劇祭での上演だったが、この作品はSPACの主導で制作されたわけではなく、昨年のリモージュでの公演もSPACは関わっていない。作

者・演出家のジャン・ランペール＝ヴィルド（リモージュ国立演劇センター芸術監督）が、静岡で目にした三島景太の劇的身体に惚れ込み、彼が17歳のときに書いたフランス語の戯曲を三島が演じるために大幅に書き換えた。平野暁人はジャンに見込まれ、翻訳・通訳だけでなく、作品の制作まで全面的に引き受けたことになった。この三人の情熱によってこの作品の公演は可能になったのである。2014年の静岡、16年のリモージュでの公演を終え、彼らはこの作品をさらに別の場所で上演することを計画している。インタビューでは公演実現までの道のりで、三島と平野がフランス人演劇人とどのような共同作業を行い、一つのチームとしてどのように信頼関係を育んできたのかを聞いた。

【01：偶然のチャンスを逃がさない】

片山：この作品は一人芝居ですが、俳優の三島景太さん、作・演出のジャン・ランペール＝ヴィルドさん、そして翻訳・通訳の平野暁人の三人四脚で作品を作つていったのですか？

平野：三人ではなく、五人のチームで作った作品ですね。三島、ジャン、僕以外に、アシスタントのアリシア、それから音響のクリストフが、このクリエーションの核になっています。

片山：作品の初演は2014年春のふじのくにせかい演劇祭ですね。それ以前にランペール＝ヴィルドとSPACの間で関わりはあったのですか？

平野：ジャンがSPACで最初に上演したのは、2011年8月の『スガンさんのやぎ』という親子向けの作品でした。この作品はSPAC以外でも北九州芸術劇場と鳥取の鳥の劇場でも公演がありました。これがジャンとSPACの最初の関わりになります。

三島：ジャンがフランスで作った作品をそのまま持ってきたもので、これもイタリア人の女性俳優による一人芝居でした。

片山：ジャンが三島さんことを知ったのはいつだったのですか？

三島：この『スガンさんのやぎ』の公演の一年前の2010年秋にジャンが静岡芸術劇場に下見に来たのです。その時に僕は今井朋彦さん演出の『わが町』に出演していました。この『わが町』のときは、今井さんの演出が好きにやらせてくれたので、それまで長年やってきたスズキ・メソッドをベースにして、人形ぶりのような動きで激しく動き回って演じてみたんです。ジャンはそのときの僕の脚の動きを見て「この役者で昔書いたあの一人芝居をリクリエーションしてみたい！」と思ったそうです。

片山：劇評でこの作品は17歳のときにジャンが書いた作品だとあつたのですが、その後、十数年間、この作品が上演されることはなかつたのですか？

平野：そうなんですよ。十数年上演されることがなかつた作品で、ジャンの大叔父さんでかつて第一次世界大戦にも従軍したフランス兵をモデルに書かれた一人芝居だったので、三島さんの脚の動きを見て、突然、やりたくなつたっていうんです。本当にドラマチックだと思います。その後、三島さんのほうにはSPACを通じてすぐにアプローチがあつたんですよね？

三島：うん、そうだつた。

平野：それからわずか数ヶ月後の2011年2月に『スガンさんのやぎ』の公演の準備のためジャンが再来日しました。僕はこの作品のナレーション録音の通訳として仕事に入ることになりました。その時にジャンが僕の仕事ぶりを買ってきて、意気投合というか、半ば口説き落とされた感じですかね。「実は今後、これこれこういう一人芝居をミシマという俳優で上演しようと思っているんだけれども、ぜひ一緒にやってくれないか？」と。その流れで急ぎよ三島さんにもお会いすることになりました。

三島：2011年2月は、僕はSPACでの仕事がなくて、東京でSPACとは別の芝居の公演をやっていたんです。ジャンのこのときの日本滞在は二、三日だけだつたのですが、彼が空いている日時にちょうど僕も空いていて。本当に偶然のタイミングで東京で会うことができたのです。そのときにはじめてジャンと平野くんに僕は会いました。

片山：三島さんにはSPACを通じて連絡が入つたのですか？

三島：宮城聰さんから「ジャンが三島くんの動きに興味を持ったと言っていたよ」という話は聞いていたし、SPAC文芸部の横山義志さんからは、「ジャンが昔やつた作品を三島くんとやりたいと言っていたよ」と聞きました。それで僕はこれは大きなチャンスだと思って、横山さんに「俺もこの話は絶対実現させたい。ジャンとの連絡をとつてくれ」と頼んでいました。

片山：でもこの時点では一人芝居だということさえ知らなかつたわけですよね？

三島：どんな作品だか全く知りませんでした（笑）。でも向こうが興味を持つてくれるのだったら、是非やりたいからと横山さんからジャンに伝えてもらつたのです。それで2月に会つたときにはじめて台本を渡されました。

平野：2月に再来日したときに、ジャンはなにがなんでもこの作品を三島さんで上演するつもりで、台本の粗訳を既に用意していました。なにしろ思いついたら片っ端からどんどん進めていく人なので。三島さんを見始めた、自分はやると決めた、自分はフランスの劇場の芸術監督なので最低でもそこでの上演は可能なはずだ。できるところからとにかくやっていく。それでその粗訳のチェックをしてほしいと頼まれたのです。僕は当初、何度も断りました。人様が心血を注いで上げた仕事をパラパラと流し読みしてコメントするというのは本来、著しく敬意を欠いた、プロとしてあるまじき行為ですから。ところがジャンは先ほどもお話しした通り、一旦こうと決めたら意地でも退かない人。仕方なく僕のほうが折れ、その場で読んでみたところ、いろいろ問題があり、それを指摘しました。すると「ぜひ君が翻訳をやってくれ」と頼みこまれて。どうしてもというので、単なる翻訳のピンチヒッターとしてではなく、この先も一貫して責任ある立場でこのクリエーションに関わらせてもらえるなら、という条件を提示しました。するとジャンは僕の目前でやおらiPhoneを取り出し、フランスへ電話をかけて制作主任（＝ジャンの妻）を呼び出すと、「もしもし、我らがファミリーに新しい仲間を迎えることに決めたよ。今後、日本に関する事業展開はすべて彼とやっていくから」と。あっけにとられましたが、それ以上に感激し、高揚したのをよく覚えています。



【02: 日仏の文化ギャップのすり合わせ作業】

片山：地方の劇場の公演であれだけ多くの劇評が出るということは、ジャンはフランスではすでに高い評価を得ている演出家なのでしょうか？

平野：ジャンは34歳くらいでカーンの公立劇場の芸術監督になっていて、これはとても若いです。しかも彼はフランスの国立高等演劇学校（コンセルヴァトワール）の出身ではないんですね。高卒でそのまま演劇の道に入ったかんじで、フランスではきわめて稀なケースといえます。僕は僕で博士課程ではアルジェリア戦争史を専攻していたまったくの門外漢なので、ジャンに「そもそも僕は演劇の研究なんかしたことない人間なんだよ、それでもいいの？」と言ったら、ジャンは「そんなの僕もしたことないさ」という返事で。ちなみにレユニオン島の出身です。生まれ育ちはレユニオンで、高校を出てから劇場などでバイトしながらお金をためて、確かにパリで仲間と一緒に廃屋のようなところを借りて、自分たちで手直ししながらアンダーグラウンドで活動をはじめたと聞いた気がします。いわば雑草育ちの成り上がりですね。フランスの演劇人としては極めてユニークなキャリアの持ち主ですが、かなり早い段階でパリのシャイヨー国立劇場に招かれて作品を作っていますので、いわゆるエリートではないだけれど、かなり若くから実績を積んできた人だといえます。

片山：翻訳にあたって、彼からリクエストはありましたか？

平野：翻訳と翻案の線引きですね。もともとはフランス軍人が主人公で第一次世界大戦の壘壕戦の話なのですが、それが日本人で第二次世界大戦になっている。骨格が大幅に変わったわけですね。ジャンは、いかにも「西洋人がオリエンタリズムでやってみました」みたいにはしたくないと言っていました。かん違いしてわびさびにあこがれてとか、サムライやチャンバラとかに染まっているようには絶対したくないということで、丁寧に取材・調査していました。僕もそういう残念なフランス人には辟易していたので、ジャンの姿勢にとても好感をもちました。

片山：仏語版と日本語版の一番大きな違いは、第一次世界大戦が第二次世界大戦になったことみたいですが、他の状況設定については、あまり変更はなかったのでしょうか？

平野：あとは「神」の問題ですね。キリスト教的な発想を日本語版ではどうするのかという問題がありました。日本人兵士の話なので、キリスト教の一神教的世界観はあり得ない。ある程度は天皇であるとか、神道と仏教の混交など、日本の宗教観に寄せていかなければ説得力を持たない。この点についてはジャンと相当議論を重ねました

片山：このすり合わせで、フランス人であるジャンが持っている日本観とこちらの認識とのずれが問題になつたりしませんでしたか？

平野：ジャンは勉強家で知識がありますし、他者や異文化に対する敬意もしっかり持っている人ですから、こちらが丁寧に説明すると「なるほど、それはきっとそうなんだろう」という受け取り方をしてくれました。「あなたがたはそう言うけれど、フランス人はこう思っているからこちらに合わせてほしい」というのはない人ですね。

片山：彼がレユニオン出身というのと、そういった相対化できる視点というのは関係あるかもしれませんね。

平野：そうですね。あの人は、いわゆる六角形のフランスについても距離のある人です。海外県、すなわち旧植民地であるレユニオンで育ったからこそ距離をとつてフランスを見られる。それと同時に、レユニオン出身であるからこそ、フランスで活動するにあたっては、正統性を担保するというか、文学や哲学などのヨーロッパの教養の正統や根幹的部分は大事にしていますね。そこを押さえないと軽んじられるというのがあるのかな。

片山：ジャンからは演出にあたってどのような要求がありましたか？

三島：最初は色々な映像を見せられました。外国の監督が撮った日本の軍人の映像とか、あとはフランスに行く前にこの作品を見ておいてくれというのがいくつかあって、それが市川崑監督の『ビルマの豊饒』と『野火』、それから小林正樹監督の『人間の条件』。

片山：演技のレファレンス資料としては、指定された映画の映像がベースだったのですね？

三島：それはもちろん、かなり参考にしました。この場面はあの映画のあの感じでという風に指示があつて。「これで本当にいいのかな？」と思いながら、自分なりに考えてやつたことを提示しました。お互いの誤解の中から、コミュニケーションが積み重なつて、それが表現になっているように感じました。



【03：独立した個人のプロジェクトとして作品制作を始める】

片山：2010年の秋に三島さんを見て、それから2011年の2月にはもうこの作品を三島さんで再演することを決めていたんですね。でも初演は2014年春なので、それからかなり時間がたっていますね？ 実際の稽古はSPACの公演が決まってからはじまったのですか？

三島：いえ、2012年の12月に、当時ジャンが芸術監督をやっていたカーンに呼ばれて、クリエーションしました。2週間で作ってしまう感じ。

平野：この時点ではSPACでは公演の話は全然出ていなくて。公演の可否については宮城さんも保留だったのですが、われわれはそういう状況のなかで実現に向けてできることを進めてきました。

三島：きっかけはSPACだったのですが、SPACとの契約ではなく、僕個人の活動としてこの作品の制作を行うというかたちで、作品を作つていったのです。平野さんもSPACとの契約ではなく、僕とジャンとの独立した仕事としてこの作品に関わることになりました。

平野：SPACの制作ではなかったので、稽古場をお借りするのもそう簡単ではなく、ジャンが当時、芸術監督をやっていたカーンの劇場が制作を丸抱える形でのスタートでした。それでカーンにわれわれを呼んで、航空券、滞在費、ギャラもカーンの劇場が持つ。ジャンは男気のある人なので、自分がやると決めたら責任もって引き受ける、親分肌の人なんです。そこで2週間稽古を行いました。

片山：2012年の12月にカーンで2週間のクリエーションをやって、そこで試演会をやつたのですか？

三島：12月に劇場関係者の人々に通し稽古は見せました。このときは美術はなしだす。セリフも完全に覚えるのではなくて、台本を譜面台みたいなものに置いてそれを見ながら動くという感じでした。その一年後の2013年12月に美術も作り、字幕も出すかたちで、カーンでプレ公演を行いました。カーンの劇場からちょっと離れた場所にある稽古場のような場所です。その時点には2014年春のSPACふじのくに「せかい演劇祭」で上演されることは決定していました。日本初演が決まっているなかでのフランス稽古というつもりで僕は行つたのですが、実際には稽古は一週間だけ、残りの一週間はほとんど色んな人に見せるプレ公演という感じでした。



【04：ふじのくに⇄世界演劇祭での初演】

片山：ふじのくに世界演劇祭での公演はどういう風に決まったのですか？

三島：当初は春フェスでの上演ではなくて、SPAC俳優の自主企画公演、『ピアノと朗読』みたいな感じの延長線でできればいいなと僕は考えていました。そういう形でなら上演できるように思ったのです。ところがジャンが直接宮城さんに上演を売り込んだんです。ものすごく熱心に。メールはもちろん、仕事やパランスで日本に来たとき、少しでも時間があると静岡にすっ飛んできて、「三島と創る芝居をSPACで上演させてくれ」と宮城さんに直談判したんです。しまいには「やってくれないと噛みつく」とか宮城さんに言つたそうです（笑）。宮城さんは最初はニコニコしながらいなしていたのですが、ジャンのその熱意は我々の作品の『SPACでの上演』という方向に宮城さんを動かしたのです。まさか芸術祭のプログラムとして上演されるとは僕は思つていなくて、芸術祭での上演が決まったときはものすごいプレッシャーを感じました。

片山：私が演劇祭での初演時にこの作品を見に行かなかつたのはあのタイトルが実は引っかかつたからなんですよ。フランス人の勘違いジャポニズムが盛り込まれた作品かなと思つてしまつたのです。

平野：そうですか。あのタイトルは宮城さんの提案なのですが、我々としては演劇祭というこれ以上ない場を用意していただけた以上、あとはお任せしようと。ジャンは「宮城さんがやると言つてくれたんだから、細かいことはぜんぶ任せる」みたいな任侠の人のようなところがある人なんです。日本語のタイトルは『旗本退屈男』のもじりになつていて、実際にそれで興味を持って観に来てくださつた観客の方も多かつたと思います。

片山：静岡での初演の反応、感触はどうでした？

三島：正直、初日の舞台が終わるまでは、自分でもこの作品が日本人の観客にどう受け止められるか本当に不安でした。「こういうのもありだけれど……」という保留つきの反応が多いのではとか。

片山：静岡の前にやつたカーンの試演会での反応はどうだつたのですか？

三島：カーンでは評判がすごくよかつたんです。ただ見に来つたのはほぼ関係者だったので、一般の観客のフラットな評価というふうには受け取れませんでした。

片山：それでは日本での初演のときはかなり緊張されましたか？

三島：ものすごく緊張しましたね。終わつて照明が消えたあと、ぱらぱらと拍手があるくらいかなと思っていたのですが、初日の舞台が終わつてカーテンコールのときの拍手が、予想していたよりも熱狂的で、手ごたえを感じました。本番前の通し稽古を見に来つたSPACの人たちもいたのですが、一人芝居だったのでとりわけ感想を言うと僕が影響を受けると思って気をつかつていたみたいで。「がんばつて」ぐらいで、感想については宮城さんも含め誰も一切何も言わなかつたのです。

片山：平野さんも初日、当然劇場にいらしたと思うのですが、「やつた！」という手ごたえはありましたか？

平野：実はあまりよく覚えてないんですよ（笑）。僕は上演中も字幕オペをやつていたんですが、これがかなり大変で。終演後はすぐにアフタートークの通訳をやらなくてはならなかつたし。感慨とかお客様の反応をうかがう余裕がなかつたんですね。でも手前みそではあります、宮城さんが翻訳をとてもほめてくださいました。「これは平野君でなければできない仕事だったんでないか」と後からわざわざメールをいただきました。一方で非常に詩的なテクストだったので、耳で聞くだけでは理解しにくい箇所があるのでないかという懸念が稽古の段階から取沙汰されており、それについての具体的かつ有意義なご指摘もいただきました。



〔リモージュ公演写真。photo: © Tristan Jeanne-Valè〕

【06: 制作チームの信頼関係】

片山: 2014年春のSPACでの公演以降は、昨年末、2016年12月のリモージュでの公演まで、この作品の公演はなかったのですね? 「いったいどうなったのだろう?」と不安になつたりしませんでしたか?

三島: ジヤンは「いずれフランスで必ずやるから」と言っていたので、いつか上演の機会はあるだろうと思っていました。焦りは全くなかつたですね。僕はこの作品は自分のライフワークとしてやることになる作品と考えています。長いスパンで上演を続けて、そのときどきの経験でゆっくり育てていく作品にしたいと思っています。

平野: その間にジヤンはカーンの劇場からリモージュの劇場に移籍しました。われわれがなぜこんなに安心してこの作品に取り組んでいけるかと言うと、ジヤンは本当に言つたことを全部やる男なんですよ。「リモージュには劇場だけでなく、俳優養成の学校がある。自分はそろそろ次代の俳優を育成することも考えていかなければならないと思っている。だから絶対リモージュに行くんだ」と彼は前から言っていました。で、そのとおり移つたんですね。個々のプロジェクトから自分の進路まで、有言実行の人なんですよ。2014年にSPACでやって、当初は翌年にフランスでやると言っていたんですけど、それがだめになつても、ジヤンがやると言つているんだから、どうせいずれフランスでやるんだ、という気持ちでわれわれは待つていました。

片山: リモージュでの公演決定の連絡があつたのはいつ頃だったのですか?

三島: 2015年の秋ですね。ちょうど僕はSPACで『王国、空を飛ぶ』の稽古をやつていたときでした。『王国』のときは筋肉トレーニングをハードにやつていた時期で体がサイズアップしていたので、それを来年に向けて体を絞つていかなければならないなと思ったのを覚えています。

片山: フランスでの公演の場合、契約はどのように行つたのですか?

平野: この作品に関してはSPACを通しての契約ではなく、僕は翻訳、通訳、字幕オペのほか、契約手続きを含め、制作業務全般を行いました。スケジュール調整から航空券の購入、出演料、映像や写真の整理、稽古日を含めた日当の問い合わせなど全てです。またこの作品では、私は翻案で大きく関与したので、僕とジヤンの共作になっています。権利を完全に二等分にしようとジヤンの方から率先して提案してくれたのです。著作権使用料も僕はいただいている。こういう部分でジヤンは本当に信頼できる人間なんですよね。ファミリーになつたら駆け引きとかいつさいしない。ちょっとマフィアっぽいというか。もちろん外とはいろいろ交渉するんですよ。でも身内になつたら何でもざっくばらんに言えるし、絶対に嘘はつかない。

三島: 出演料、交通費、滞在費などすべてリモージュの劇場の負担でした。

片山: 向こうでのクリエーション期間中はどこに滞在していたのですか?

三島: 劇場から歩いて15分くらいのところにあるアパルトマンに滞在しました。

平野: 公演の稽古の前にまず2週間、演劇学校での授業というのがあって。この演劇学校での授業と公演のセットで招かれたんです。前半2週間は授業、後半2週間は公演というかたちです。

片山: 授業プログラムを考えて渡仏したわけですね。

三島: SPACでやつている俳優訓練法を柱にごく大ざっぱにプログラムをイメージしていました。2週間のワークショップの講師をやるのは僕にとっては初めての経験でした。現場で生徒たちの状態を見てから具体的にどうしようか決めました。

片山: 最後に作品を上演したりしたのですか?

三島: 俳優訓練法だけだと時間が持たないかなと思って、後半の一週間は作品を作ろうかなと思って戯曲も用意していたのですが。実際には作品を作る時間はなかつたです。一日6時間で2週間、月から金で10日間なのでけっこう時間があると思っていたのですが。

片山: フランスの俳優志望の生徒たちは、頭でっかちでフィジカル面で弱い人が多いと聞いたことがあるのですが、どうでしたか?

三島: いやフィジカルができていないなんてことはなかつたです。リモージュの生徒たちはすごく優秀でした。ただ同じようなことを僕も聞いていたので、行く前は日本の高校演劇みたいな感じなのかなと思っていたのですが、とんでもなかつたです。

平野: 補足しますと、校長であるジヤン自身がものすごく俳優の身体性に重きを置く人なんです。彼が三島さんにはれ込んだ最大の理由は、それこそ三

島さんがフランス人俳優が持っていない身体性を持っている点で、逆に言うと三島さんがこれだけほれ込まれたのはジャンからするとフランス人俳優の身体に不満があったからですね。そういうこともあって、彼がリモージュに移って最初に選んだ生徒たちの選考においては、身体性を重視したそうです。500人からの応募があつたと聞いています。

片山：現地ではコミュニケーションのギャップみたいなことはなかつたですか？

三島：ないですね。コミュニケーションに対しては皆無。最初は言っていることがうまく伝わらないとかあるんではないかと思ったのですが、そんなことはまったくなくて。ちょっと説明したら本当に本質的なところにたどり着く。あ、これできるんだったら、これもやろうという感じで、どんどん進んでいきました。思っている以上に何もかもがスムーズでしたね。

平野：学校だけでなく、2012年のジャンとの付き合い以来、われわれのあいだでコミュニケーションの行き違いみたいなことはまったくなかつたです。ジャンの演出の面でも、スタッフとのコミュニケーション、劇場スタッフの受け入れ態勢にも。アシスタントもいつも身を粉にして働いていつも機嫌がいいし。ジャンはそういう環境づくりに長けているんですよね。気持ちよく仕事ができない人とは仕事はしない。



[リモージュ公演写真。photo: © Tristan Jeanne-Valè]

【07：リモージュ公演の様子】

片山：今回は公演のための稽古は現地でどれくらい行つたのですか？

三島：リモージュでの稽古期間は4日間だけでした。そのうちジャンがいたのが2日だけ（笑）。それも一日中やるわけではなくて、「疲れているだろうから2時入りでいいよ」みたいな。稽古の初日にいきなり頭から最後までやりました。この初日稽古には演劇学校の生徒たちが見に来てくれました。

片山：日本でも相当な段階まで準備していたのですか？

三島：2014年にやったことを踏まえて、セリフだけはしやべり込むだけしやべり込んでいこうと思っていて、リモージュ行きの三か月前から準備していました。ノルマを決めて一日に何回、最初から最後までセリフを間違えずにしやべるとか。本能に叩き込むという感じでなければだめだと思って。それでセリフは完璧に入れて向こうに行つたのです。しかしセリフ以外は全部忘れていました。でも音がかかった瞬間に、体の記憶というのは根深くて、その感じにすっと戻れた。

片山：リモージュ版では2014年のSPAC版からの変更点はありましたか？

三島：SPAC版では4面開みだったのが、3面開みになりました。これが大きい変更点ですね。日本の公演では真ん中に櫓にあつて、客席が4面でした。背中まで見られていたのです。リモージュ公演では字幕をつけなくてはならないので、3面になりました。櫓は盆踊りの櫓がモデルなので、食卓テーブル二つ分くらいの広さです。

片山：日本の歌謡も作品で使つたようですが、これはジャンからそういうリクエストがあつたのですか？

平野：一緒に調べました。例えば学校の愛唱歌で誰でも知つてゐる曲とか、少し神秘的なものとか。一緒に探してYoutubeで聞かせてという感じで。

片山：今回、私が確認しただけでも劇評が6本ありました。これは異例なことだと思うのです。地方の劇場での公演で6本、しかも好意的でかなり熱い内容の劇評が多かったです。向こうの観客の反応も熱狂的でしたか？

平野：お客様の反応は本当によかつたですね。

片山：リモージュ公演のほうがむしろ日本での初演より緊張はなかつたのですか？

三島：リモージュでの公演は、日本での初日はどセンシティブというかナイーブ、不安になることはあまりなかつた。体の状態が多少万全とは言えないところがあつたので、最後まで同じ状態でいけるかなというのではありませんが、これはまあ普通によくあることなので。

片山：劇場のキヤバはどれくらいだつたのですか？

三島：150人くらいです。

平野：舞台上舞台の特設だったので、それくらいになりました。本来の座席数は400くらいです。

片山：今回の成功的カギは？ やる前から「いけるぞ」という感じはあつたのですか？

三島：僕はフランスに関しては大丈夫だと思っていました。カーンでやつたときの感触からいって。

平野：カギはやはり三島さんの身体ですね。

片山：フランスの観客からすると非常に特異で印象的な身体性だったのですね？

平野：本当にそれはそうだと思います。90分という長時間、一人で舞台にたち、膨大な詩的なテキストを語る。字幕が観客にとってストレスになるかと思つたら、「いや、大丈夫。途中からそんなに読もうと思わなくなつた（笑）。その人を見ていればいいから、そんなに字幕が読めないストレスはない」といったことを言われました。書き手としては複雑かもしれないし、せつかく長台詞覚えた三島さんも気の毒だし、ついでに字幕をせつせと出している僕もちょっとだけ悲しいですけれど（笑）、それだけ三島さんの身体の存在感があつたということだと思います。

三島：僕としては、ことばによって自分の身体が持つている潜在的な感覚を解放するという感じです。自分が何かをコントロールしているというよりは、言葉を発した時に体のなかに起こっていることにあらがわないでやつてはいるだけなんです。それがいいのかもしれない。ジャンの演出自体、俳優の作為みたいなことを一切やらない。自然に出てきたもの自体をどう見せるかという感じなので。

片山：再演の予定はありますか？

平野：いろいろと話は出ていて固まりつつあるのですが、今の段階ではまだちょっと言えない状況ですね。フランスでも再演を目指していますが、まずは日本での再演を狙っています。

【プロフィール】

三島景太

1967年生。福岡県福岡市出身。水戸芸術館ACM劇場専属俳優を経て、1997年のSPAC創立時より所属。宮城聰、鈴木忠志、イ・ウンテク、竹内登志子、オマール・ポラス、原田一樹、今井朋彦、小野寺修二等、様々な演出家の作品に出演。国内外40都市以上の公演経験を誇る名優。主な主演作品『ロビンソンとクルーソー』『ドン・ファン』『ドン・キホーテ』など。

平野暁人

東京都出身。翻訳家、通訳（フランス語、イタリア語）。戯曲から精神分析、ノンフィクションまで幅広く手がける。戯曲翻訳としてはパスカル・ランペール『愛のおわり』、モーリス・メーテルリンク『盲点たち』他多数。訳書にカトリーヌ・オディイベル『ひとりではいられない』症候群（講談社）、クリストフ・ファイアット『フクシマ・ゴジラ・ヒロシマ』（明石書店）他。演劇における日仏共同事業の仲介者として、青年団やSPACをはじめ、ジュヌビリエ国立演劇センター、リムーザン国立演劇センターなど国内外に複数の拠点を置き活動を続ける。

ジャン・ランペール＝ヴィルド Jean Lambert-wild

劇作家・演出家。1972年、アフリカ・アジア・ヨーロッパの文化が混在するレユニオン島（フランス海外県、マダガスカル島の東方）生まれ。その特異な風土で培われた詩的想像力と、舞台技術に関する豊富な知識に支えられた魔術的演出術が高く評価され、2007年にノルマンディー国立演劇センター（コメディ・ド・カーン）、2015年よりリムーザン国立演劇センター（ユニオン劇場）の芸術監督、ユニオン・アカデミー、リムーザン国立演劇学校の校長。公式ウェブページ（英語）：<http://www.lambert-wild.com/en>

【参考リンク】

- ・『磐谷和泉の栄光と倦怠（ジャン×Keitaの隊長退屈男）』舞台映像抜粋Splendeur et lassitude du capitaine Iwatani Isumi: <https://youtu.be/x4dNBJw87nQ>
- ・ユニオン劇場アカデミーでの三島景太ワークショップ Stage « Méthode Susuki » dirigé par Keita Mishima : <http://academietheatrelimoges.fr/stage-methode-susuki/>
- ・ユニオン劇場『磐谷和泉の栄光と倦怠』公演ページ: <http://www.theatre-union.fr/fr/spectacle/splendeur-et-lassitude-du-capitaine-iwatani-izumi>

[インタビュー 三島景太 平野暁人 片山幹生 SPAC ジャン・ランペール＝ヴィルド 磐谷和泉の栄光と倦怠 ジャン×Keitaの隊長退屈男](#)

6月 11, 2017に投稿しました

Share this

Like 99

Tweet

[前の投稿](#) [次の投稿](#)

© Copyright 2015WL このサイトに掲載の記事や写真の無断転載を禁止します。